

## 小児看護学（幼稚園）実習の有効性の検討

実習前後の看護学生の子ども観と実習のとらえ方の変化から

遠藤 芳子・後藤 順子

A study of an effectiveness of the practical training program at the pediatric nursing : Focusing on changes in the views of nursing students towards children and in the impression on the training.

Yoshiko ENDO , Junko GOTO

Abstract : It is predicted that nursing students will feel uneasy when they come to deal with children or the elderly due to the fact that there has been a lack of contact with these groups of people in this present, ever-changing society.

The pediatric nursing department of our university initiated a practical training program in a nursery school before their course practical training period in hospitals. A questionnaire was given to the 46 students taking part in this program. Students' information about the number of their siblings, their experience with the young, their feelings towards children, their general view of children, and the impression of the program were collected and analyzed, and discussed about the effectiveness of the practical training program.

The results showed :

1. More than half of the students had a brother or sister.
2. Half the students had regular contact with children.
3. The number of students who answered that they 'loved kids' increased two times of the number asked before the program.
4. There was a significant increase in the number of students who answered 'likeable', 'well-behaved', 'energetic', 'fun', regarding the students' general view of children after the program was completed.
5. There was also an increase in the more positive responses regarding the worth of the program. Many students responded to this question with: 'It was fun', 'I gained confidence', 'I wanted the program to last longer', 'I didn't feel troubled', and 'It wasn't stressful nor hard.
6. There was the effectiveness in the practical training program, because the students learned about healthy children and they got the affirmative changes by this program.

Key Words : Nursing students, practical training in a nursery school, feelings towards children, view about children, impression of the practical training

## はじめに

社会構造の変化により, 高齢者や子どもと触れあう機会の少ない看護学生が多くなっていると考えられる。そのため, 看護学生が臨地実習において子どもとの関わりに戸惑うことが予想される。

山形県立保健医療大学(以下, 本学)の小児看護学実習は2週間2単位である。3年次に1週間, 健康な子どもの生活と個別的成長発達を幼稚園で学び, 4年次に1週間, 病棟において健康障害をもつ子どもに対する看護を学ぶ実習を行なっている。

本学は, 平成12年4月から4年制大学となり, 1期生の初めての幼稚園実習を実施するに当たり, 実習に対する学生の心理状態や, 4年制大学としての実習について, 計画, 内容, 実施に関する評価および今後の指針を模索するために調査をする必要があった。

芳田<sup>1)</sup>が「病気療養中とはいえ子どもの能動的な態度を養い, 発揮させるような積極的な働きかけを展開していくには, その目標となる健康な子ども像を看護学生自身が把握しておくことが不可欠である」と述べており, 古庄<sup>2)</sup>が病院実習直前に保育所実習・小学校実習を行うことは「健康な子どもの理解を深めることができ, 病院実習での病気の子どもの看護に生かすことができた」と報告しているように, 健康障害をもつ子どもに接する前に健康な子どもと接触することは, 学習効果から考えても重要であるといえる。

病院や保育園実習前後の看護学生の子どもに対するイメージ変化を明らかにしたものは多く報告されている。そして, 看護学生が子どもと接触することによって子どもに対するイメージが肯定的になることも報告されている<sup>3-6)</sup>。

本研究は, 本学の看護学生の幼稚園実習前における子どもとの接触状況および子どもに対する好き嫌いや子ども観, 実習のとらえ方が, 幼稚園実習をすることによってどう変化するかを明らかにすることと実習の有効性を検討することに焦点をあて実施した。

## 研究目的

1. 本学の看護学生のきょうだい数, きょうだい順位, 子どもとの接触経験などの学生の環境を明らかにする。

2. 本学の看護学生の幼稚園実習前後の子どもの好き嫌いの程度の変化, 子ども観および実習のとらえ方の変化を明らかにする。

3. 本学における小児看護学実習のひとつである幼稚園実習の有効性を考察する。

## 研究方法

### 1. 対象

本学の小児看護学(幼稚園)実習を履修した看護学生3学年46人。小児看護学に関する講義はすべて終了している。

実施前に自由意志での参加であることと評価に反映しないことを説明し, さらに個人が特定されないように配慮することを保証した。学会発表することも同意を得た。

### 2. 用語の定義

「子ども」は, 小児看護学の対象としている乳幼児とした。

「子ども観」とは, 看護学生の子どものイメージのとらえ方をあらわす。

### 3. 研究方法

#### 1) 調査方法

先行研究を参考にして作成した自記入式質問紙によって調査した。実習前の調査用紙の配布と回収は, 実習オリエンテーション時に行い, 実習後の調査用紙は, 実習中に配布し, 実習終了後に回収した。

#### 2) 調査用紙

実習前後の「好き嫌い」の程度の変化をみる質問は「大好き」「どちらかといえば好き」「どちらでもない」「どちらかといえば嫌い」「大嫌い」の5段階評定尺度法とした。

子ども観は, 中新ら<sup>7)</sup>の調査研究で使用された子どものイメージである「かわいい」「うるさい」「小さい」「無邪気」「生意気」「か弱い」「元気」「面白い」に「わがまま」「乱暴」の2項目を加え10項目とした釜島ら<sup>8)</sup>の作成した自記入式質問紙によって測定した。それぞれについて「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の4段階評定尺度法とした。

実習のとらえ方は, 実習前「大変だ」「楽しみ

だ」「自信がある」「一緒に遊びたい」「難しい」「世話をしたい」「不安だ」「苦痛だ」の8項目とし、実習後は「大変だった」「楽しかった」「自信がついた」「十分遊べた」「難しかった」「もっと世話をしたかった」「不安だった」「苦痛だった」の8項目で、それぞれについて「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の4段階評定尺度法とした。

### 3) 分析方法

結果は、実習前後の子どもの好き嫌い、子ども観、実習のとらえ方のそれぞれの程度の変化についてt検定（有意水準は5%とした）を行い、分析、考察を行った。統計処理には Statistical Package for the Social Science 11.0J for Windows（SPSS）を使用した。

## 本学の幼稚園実習の概要

### 1. 小児看護学実習の位置づけ

本学の臨地実習は1年次に基礎看護学実習が45時間、2年次に基礎看護学実習が90時間あり、3年次に成人老年看護学実習が90時間、地域看護学実習が45時間、小児看護学実習が45時間（1単位）ある。4年次には、成人老年看護学実習・がそれぞれ135時間、精神看護学実習が90時間、地域看護学実習が90時間、母性看護学実習が90時間、小児看護学実習が45時間（1単位）ある。

### 2. 小児看護学実習の構成とそれぞれの関連

小児看護学実習とは、それぞれ幼稚園実習と病院実習である。幼稚園実習は市内11か所の幼稚園で実施し、病院は山形県立中央病院の小児病棟で実施している。病院実習の前に幼稚園実習を実施して、疾患をもった子どもにその目標となる健康な子ども像を把握するための実習とする。

### 3. 幼稚園実習の実施内容

#### 1) 目的

幼児期にある健康な小児の日常生活行動を理解するとともに、小児期の成長発達段階を個別的にとらえ、個々の成長発達段階に応じた看護実践に必要な知識・技術・態度を習得する。さらに、看護職者としての態度も習得する。

#### 2) 目標

- (1) 幼児の身体的成長、情緒的・社会的発達状態を理解する。
- (2) 幼児期にある対象を社会の一員として理解し、個々の小児の特徴をふまえた人間関係を成立できる。
- (3) 幼稚園の保育環境、幼児の具体的な生活の実状について、参観し、健康な小児の実態を理解する。
- (4) 指導教諭の保育の技術や幼児に対する接触や誘導方法などを学び、幼児保育の実際を体験する。
- (5) 看護職として、健康な小児を理解し、子どもの生活環境や健康教育および管理を学ぶ。また、看護職者としての態度、健康管理などを学ぶ。

#### 3) 方法

- (1) オリエンテーションは、各幼稚園において、実習初日に行う。
- (2) 実習項目表を参考に各施設における状況を確認すること、さらに各自その日の目標を立て、園の1日の流れに沿って実習し、目標および学習したことを記録する。
- (3) 指導教諭の指導によって、幼児の保育や幼児に対する接触や誘導の方法と姿勢を学び、幼児保育の実際を体験する。
- (4) 受け持ちクラスは指導教諭が決める。
- (5) 実習幼稚園において金曜日までに反省会を持つ。
- (6) その日の実習記録はその日のうちに記録する。
- (7) 登園したら、実習記録を指導教諭に提出し、前日の記録の点検を受け、押印をもらう。その後、その日の実習について指導教諭の指示を受ける。
- (8) 実習のまとめは幼稚園実習終了後に記入し、翌週の月曜日17:00までに担当教員の研究室に提出する。

## 結 果

### 1. 対象の属性

46人の対象に調査を依頼した結果、46人から回答があった（回収率100%）、有効回答も100%であった。男性8人（17.4%）、女性38人（82.6%）

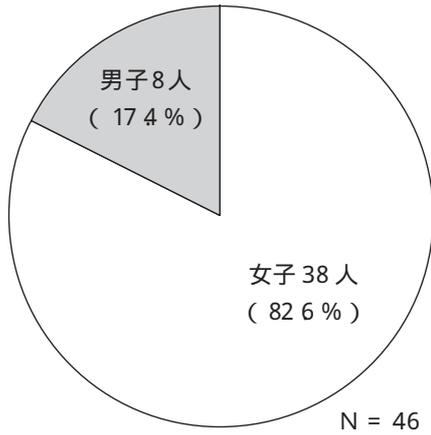


図1 学生の人数と男女の割合

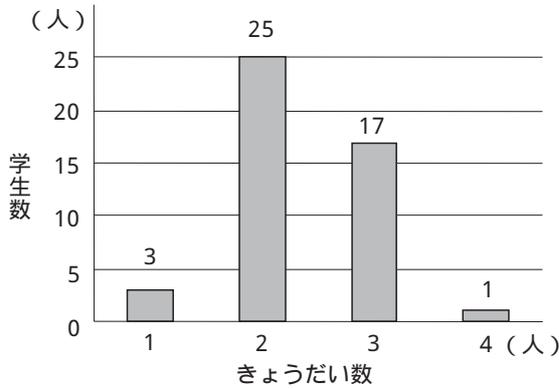


図2 対象のきょうだい数

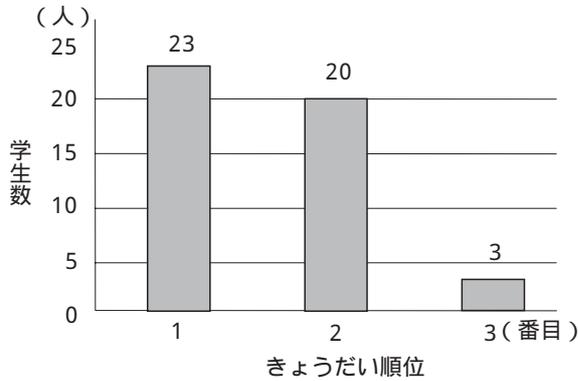


図3 対象のきょうだい順位

であった(図1)。

2. 対象のきょうだい数ときょうだい順位

1人っ子は3人(6.5%), 2人きょうだいは25人(54.3%), 3人きょうだいは17人(37.0%) 4人きょうだいは1人(2.2%), で, 平均2.4人きょうだいであった(図2)。

きょうだい順位は, 第1子が23人(50.0%),

表1 子どもとの接触経験

接触経験人 (%)	接触頻度	人数(人)
現在ある 23人(50%)	毎日ある	0
	時々ある	11
	たまにある	12
今はないが以前あった 18人(39.1%)	毎日あった	1
	時々あった	8
	たまにあった	9
まったくない		5
5人(10.9%)		
総計		46

表2 子どもが好き嫌いの変化

評定尺度	実習前(人)	実習後(人)
大好き	17	32
どちらかといえば好き	16	11
どちらでもない	10	2
どちらかといえば嫌い	2	0
大嫌い	1	1
総計	46	46

第2子が20人(43.4%), 第3子が3人(6.5%)であった(図3)。

3. 対象の子どもとの接触経験

「現在ある」が23人(50.0%)「以前あった」が18人(39.1%)「全くない」が5人(10.9%)であった(表1)。

4. 実習前後の「子どもが好き嫌い」の程度の変化

実習前に子どもが「大好き」と答えた対象は17人(37.0%), 「どちらかといえば好き」は16人(34.8%), 「どちらでもない」は10人(21.3%), 「どちらかといえば嫌い」は2人(4.3%), 「大嫌い」は1人(2.2%)であった。実習後に子どもが「大好き」と答えた対象は32人(69.6%), 「どちらかといえば好き」は11人(23.9%), 「どちらでもない」は2人(4.3%), 「どちらかといえば嫌い」は0, 「大嫌い」が1人(2.2%)であった。実習前後で学生の子どもの好き嫌いの程度は「大好き」の割合が有意に増加していた( $p < .001$ ) (表2)。

5. 実習前後の「子ども観」の程度の変化

「かわいい」は実習後有意に「かわいい」の割合が増加していた ( $p < .001$ )、「生意気」は実習後思わない割合が有意に増加した ( $p < .01$ )、「元気」は「元気だ」と思う割合が増加した ( $p < .05$ )、「面白い」はそう思う割合が増加した ( $p < .01$ )

「うるさい」「小さい」「無邪気」「か弱い」「わがまま」「乱暴」は実習前後で変化がみられなかった (図4)

6. 実習前後の「実習のとらえ方」の程度の変化

「楽しい」は実習後「楽しかった」の割合が増加

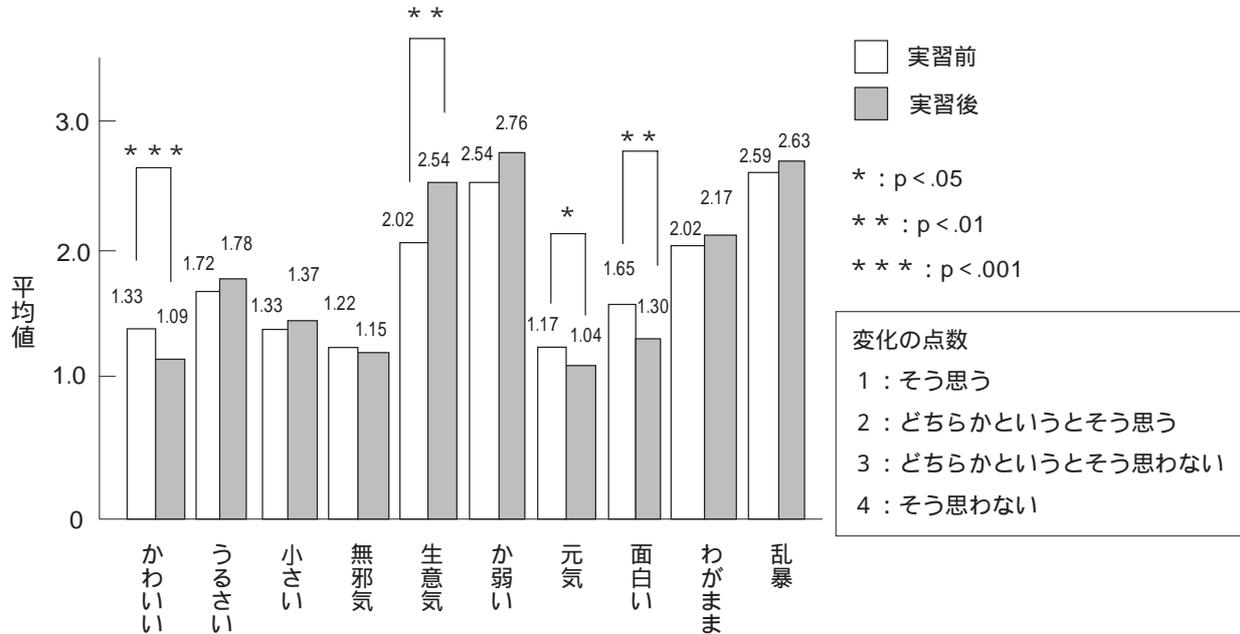


図4 実習前後の「子ども観」の変化

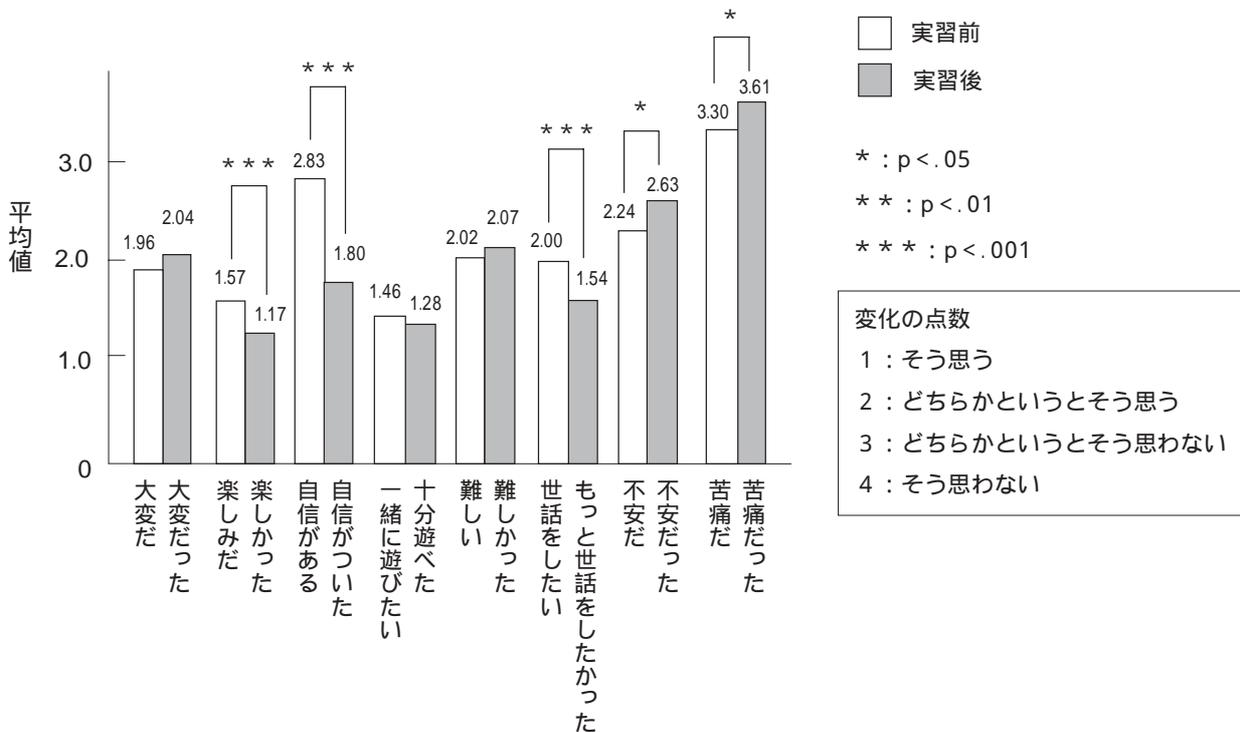


図5 実習前後の「実習のとらえ方」の変化

した ( $p < .001$ )。「自信」は「自信がついた」の割合が増加した ( $p < .001$ )。

「世話」は実習後「もっと世話したかった」の割合が増加した ( $p < .001$ )。「不安」は実習後「不安に思わない」の割合が増加した ( $p < .05$ )。「苦痛」は「苦痛と思わない」の割合が増加した ( $p < .05$ ) (図5)。

#### 7. まったく変化しなかった学生

今回の調査で実習前後に「子どもが大嫌い」と答え、実習前後「かわいい」と思わない、実習に対しても「楽しい」、「自信がある」、「遊びたい」、「世話したい」と思わず、「不安だった」、「苦痛だった」と答えている学生が一人いた。

### 考 察

#### 1. 対象のきょうだい数と順位

きょうだい数は平均2.4人であることから、平成11年の全国平均合計特殊出生率1.34に比べるとまだ少子社会に向かいながらも1人っ子は少ないという結果だった。

きょうだいのいる看護学生が43人と大多数であり、高橋<sup>8)</sup>が「多人数のきょうだいの中では、その順位や数が子どもの性格形成などに大きく影響していた」と述べていることから、きょうだい間におこりうる葛藤や競争心、協調心、役割意識をもつことなどについては経験をしていると考えられた。

#### 2. 対象の子どもとの接触経験

半数の看護学生が現在も接触があると答えたことは、予想したよりも多かった。どこでどの程度の接触かという調査をしていないので判断はできないが、前提とした「接触が希薄」ということは言い切れないと考えられた。しかし、まったく接触がない学生が10.8%という結果は平元<sup>9)</sup>(1983年)や谷本<sup>4)</sup>(1999年)の報告した7%台に比較すると多かったことから、やはり、家族や近隣などの子どもとの接触が希薄になってきていることは否めないと考えられた。

#### 3. 実習前後の「子どもの好き嫌い」の程度の変化

実習前に比べ「大好き」が約2倍になっているのは、「どちらかといえば好き」と「どちらでもな

い」の対象が「大好き」に変化したからと考えられた。これは、子どもから受けた尊敬や感謝の気持ち、一緒に過ごしたことによる実習体験から子どもへの好感度が増したためと考えられた。

#### 4. 実習前後の「子ども観」の程度の変化

谷本<sup>4)</sup>が、「実習前は『うるさい・騒がしい』『わがまま・気分や・気まぐれ』『にぎやか』という感覚的なイメージでとらえた乳幼児の喜怒哀楽の一部分も、その原因や意味を考えるよう変化したことで喜怒哀楽の激しい乳幼児に近づきたくないという気持ちが減少した」と述べている。本学の看護学生においても、感覚的なイメージでとらえていた子どもに対するイメージが実習したことによって、その意味するところを見出したために「かわいい」「元気」「おもしろい」という肯定的な割合の増加という結果を示し、「生意気だ」とは感じなくなったと考えられた。子ども観は健康な子どもの特性を示していることから、今回の実習の結果から看護学生は健康な子どもを理解することができたと推測された。

#### 5. 実習前後の「実習のとらえ方」の程度の変化

谷本<sup>4)</sup>が述べているように、看護学生は実習において、積極的に子どもたちを理解しようとかかわり、子どもの実像に触れることで、子どもの各年齢の成長発達の特徴や個人差や子どもの気持ちへの理解が深まり、子どもと接することに対してもっていた漠然とした「不安が解消され」、「苦痛が減少し」、「実習が楽しい」と感じられるように変化したと考えられた。岸川<sup>10)</sup>は、「保育所実習は健康に生活している乳幼児と関わることにより具体的・現実的な子ども像を形成できる効果的な実習」と述べており、今回の結果から、幼稚園実習が有効であったと考えられた。しかし、中新<sup>7)</sup>は「『感じていること』と『実践できること』は別であり、実習場面での指導者の関わりの方が重要」と述べており、幼稚園実習中に看護学生が感じたことや学んだことを病院実習で実践できるように強化していく働きかけが教員には必要であると考えられた。

#### 6. まったく変化しなかった学生への対応

実習終了後に変化のみられなかった学生について

ては、幼稚園実習は大変苦痛であったことが伺われる。こうした学生が少数でも存在することは今後も考えられるが、特別扱いはせず、実習目的が達成できるように見守り、最後まで実習できるように配慮していくことが肝要と考えられた。谷本ら<sup>4)</sup>は「(学生の学びの)経過の中で、学生が子どもに関わる事の喜び・楽しさを感じることができれば、さらにこの実習の効果が高まる」と述べているが、この点を考慮し、学生に対する実習指導のあり方を考えていく必要がある。

#### 7. 幼稚園実習の有効性

今回の結果から、子どもの実態に触れ、共に遊んだり、対応に苦慮したりした幼稚園実習を終了した看護学生たちは、この実習から、子どもに対する変化が多くみられ、健康な子どもを理解できるようになったと考えられ、幼稚園実習の目的、目標が達せられ、実習は有効であったと考えられた。

#### 結 論

本学の看護学生において

1. 46人中二人きょうだいは過半数であった。
2. 子どもとの接触経験は、「現在ある」が半数であった。
3. 子どもの好き嫌いの程度は実習前に比べ「大好き」の割合が約2倍になっていた。
4. 子ども観の変化では、実習後「かわいい」「生意気と思わない」「元気だ」「面白い」の割合が有意に増加していた。
5. 実習のとらえ方では、「楽しかった」「自信がついた」「もっと世話したかった」「不安に思わない」「苦痛と思わない」という結果で肯定的な割合が有意に増加していた。
6. 健康な子どもの実態を理解し、健康な子どもを肯定的にとらえることができるようになったという点から、幼稚園実習の目的、目標が達せられ、実習は有効であったと考えられた。

#### おわりに

この研究に協力をいただいた看護学生の皆様とご指導をいただいた山梨県立看護大学の中久喜町子先生と釜島美智代先生に深謝いたします。

#### 文 献

- 1) 芳田章子：小児看護学実習における保育実習の意義．藍野学院紀要．13：56-61,1999．
- 2) 古庄智美：実習形態を変更した小児看護学実習の実習状況 病院実習直前に保育園実習・小学校実習を行うことの効果 神奈川県立病院附属看護専門学校紀要．5：28-31,2000．
- 3) 古谷佳由理，内田雅代，兼松百合子，武田淳子，丸 光恵：小児病棟実習前後における学生の子どもに対するイメージの変化について 受け持ち患児の年齢，実習病院，学生の不安・認識の違いより ．千葉大学看護学部紀要 .17: 97-104,1995．
- 4) 谷本公重，猪下 光，尾形美智子：看護学生の幼稚園・保育園実習前後における子どもへの認知とイメージの変化．香川医科大学看護学雑誌．3(2)：7-14,1999．
- 5) 上山和子：看護学生の子どもに対するイメージ変化と小児看護学の授業方法について．新見公立短期大学紀要．20：125-133,1999．
- 6) 釜島美智代，中久喜町子：小児看護学実習前後の学生の子ども観と実習のとらえ方の変化．山梨県立看護大学紀要．5(1)：51-59,2003．
- 7) 中新美保子：看護学生の子ども観の変化 小児看護履修前に視点をあてた10年前との比較 ．第25回日本看護学会集録集(看護教育)．138-140,1994．
- 8) 高橋種昭：“第5章乳幼児の生活とその指導 2. 乳幼児の生活環境とその指導 2) 家族関係，(2)きょうだい関係” 乳幼児の検診と保健指導(第版)，金川克子，清水美登里，高野 陽，高橋種昭，羽室俊子編，東京，医歯薬出版株式会社，pp.84-85,1997．
- 9) 平元 泉，野村誠子，石井範子：小児看護学実習における保育園実習の効果 - 時期による学生の学びの比較 ．秋田大学医療技術短期大学部紀要．(2)：145-152,1998．
- 10) 岸川亜矢，田村佳士枝：小児看護実習前の保育所実習経験の効果～保育所実習を経験した学生と経験していない学生のアンケートの比較から～ ．千葉県立衛生短期大学紀要，19(1)：7-14,2000．

2003.10.31 受稿，2004.1.14 受理

## 要 旨

社会構造の変化から高齢者や子どもとの接触機会が少ないと思われる看護学生はその対応に戸惑うことが予想される。

山形県立保健医療大学の小児看護学の臨地実習では，病院実習の前に幼稚園実習を実施している。今回この実習をする看護学生46人のきょうだい数や子どもとの接触経験などと実習前後の子どもの好き嫌い，子ども観，実習のとらえ方の変化を調査し，実習の有効性も検討した。

その結果，

- 1．過半数の学生が二人きょうだいであった。
- 2．子どもとの接触経験は「現在ある」が半数であった。
- 3．子どもの好き嫌いの程度では，実習前に比べ「大好き」が約2倍になっていた。
- 4．子ども観の変化では，実習後「かわいい」「生意気と思わない」「元気だ」「面白い」の割合が有意に増加していた。
- 5．実習のとらえ方では，「楽しかった」「自信がついた」「もっと世話したかった」「不安に思わない」「苦痛と思わない」という結果で肯定的な割合が増加していた。
- 6．健康な子どもの実態を理解し，健康な子どもを肯定的にとらえることができるようになったという点から，幼稚園実習の目的，目標が達せられ，実習は有効であったと考えられた。

キーワード：看護学生，幼稚園実習，子どもの好き嫌い，子ども観，実習のとらえ方